

国際漁業資源評価調査・情報提供委託事業
(要約)

和田由香

目的

国連海洋法条約に基づき、公海を回遊しているマグロ類及びサメ類の科学的データを補完するための調査を行った。なお、本調査は、水産庁の国際漁業資源評価調査・情報提供委託事業の一環として実施した。

材料と方法

1. クロマグロ

(1) 漁獲状況調査

2016年1月～12月に調査対象とした図1に示す8地区にある漁業協同組合等（新深浦町漁業協同組合岩崎支所、深浦漁業協同組合、小泊漁業協同組合、三厩漁業協同組合、大間漁業協同組合、尻労漁業協同組合、六ヶ所村海水漁業協同組合、八戸みなと漁業協同組合及び(株)八戸魚市場）から水揚げ伝票を入手し、月別、漁法別、銘柄別に漁獲量を取りまとめた。

(2) 生物測定調査

2016年1月～12月に調査対象とした図1に示す深浦漁業協同組合、三厩漁業協同組合において、漁協職員が測定した尾叉長、体重データを入手し、月別にとりまとめた。また、大間漁業協同組合において、(国研)水産研究・教育機構国際水産資源研究所が測定した尾叉長、体重データを入手した。なお、尾叉長の測定は、三厩では漁獲された573個体中459個体、深浦では2,393個体中242個体、大間では1,841個体中1,270個体について行った。

2. サメ類

2016年1月～12月に調査対象とした八戸地区(図1)にある八戸みなと漁業協同組合及び(株)八戸魚市場の水揚げ伝票から、月別、漁法別、銘柄別の漁獲量を取りまとめた。

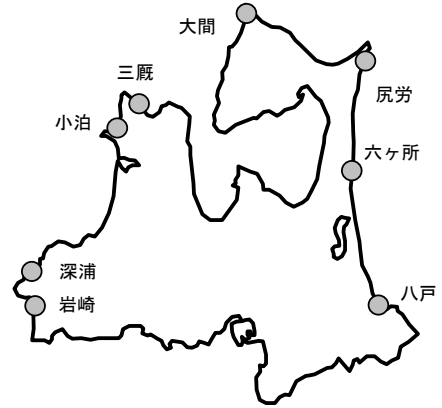


図1. 調査地点

結果

1. クロマグロ

(1) 漁獲状況調査

調査対象8地区全体の漁獲量は、400トンと前年(582トン)の69%であった。海域別にみると、日本海(岩崎、深浦、小泊)では、197トンと前年(246トン)の80%、津軽海峡(三厩、大間)では、185トンと前年(283トン)の65%、太平洋(尻労、六ヶ所、八戸)では、19トンと前年(53トン)の37%であった(図2)。

定置網を主体とした日本海の深浦、岩崎の漁

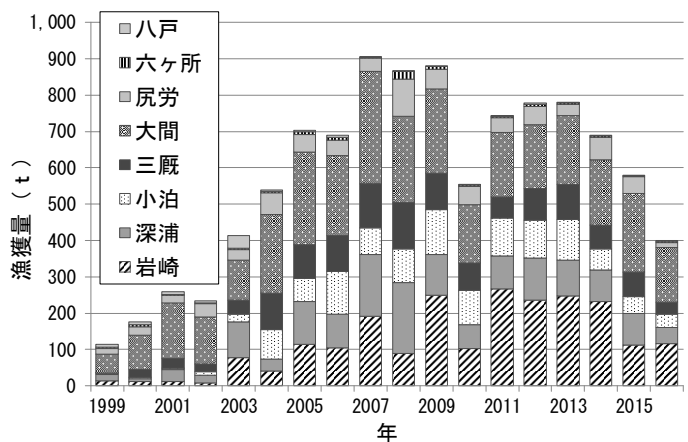


図2. 漁協別クロマグロ年間漁獲量の推移

獲のピークは6月にみられた。釣り、延縄を主体とした小泊では8月～9月に、津軽海峡の三厩、大間では7月～12月に多く漁獲された。定置網主体の太平洋の尻労では、6月と10月に漁獲のピークがみられた(図3)。

(2) 生物測定調査

三厩、深浦、大間におけるクロマグロの尾叉長組成を図4に示した。三厩では100 cm～130 cmが主体で、11月以降は160 cm以上のものも漁獲されていた。深浦では盛漁期の6月～7月に110 cm～120 cmが主体で、10月～11月には80 cmのものも漁獲されていた。大間では170 cm～180 cmに漁獲のモードがあった。

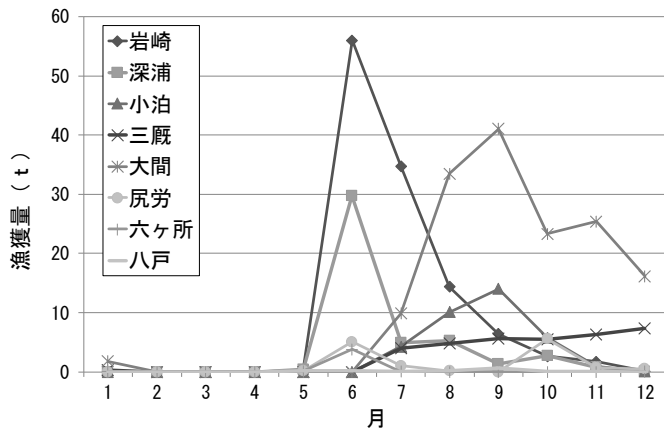


図3. 2015年の青森県沿岸8漁協におけるクロマグロ漁獲量の月別推移

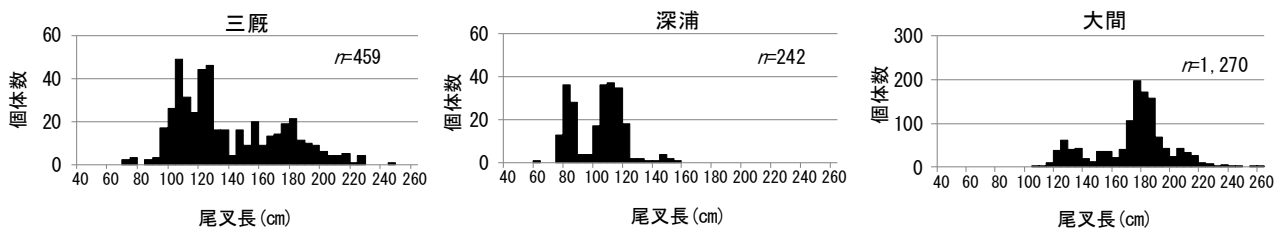


図4. 三厩、深浦、大間に水揚げされたクロマグロの尾叉長組成

2. サメ類

全漁獲量の99%をアブラツノザメが占め、そのほかネズミザメ等が少量水揚げされた。八戸のサメ類の漁獲量は、1995年から1999年は400トン～500トン台であったが、2002年から2006年にかけて100トン～200トン台と低迷した。その後漁獲量は2007年に増加し、以降は300トン～600トン台で推移した。2016年の漁獲量は616トンと前年(331トン)の186%で、1994年以降では2009年(621トン)に次いで2番目に多かった(図5)。月別では、漁獲量は1月、12月の冬季に多く、2016年は12月に163トンと最も多く漁獲された(図6)。

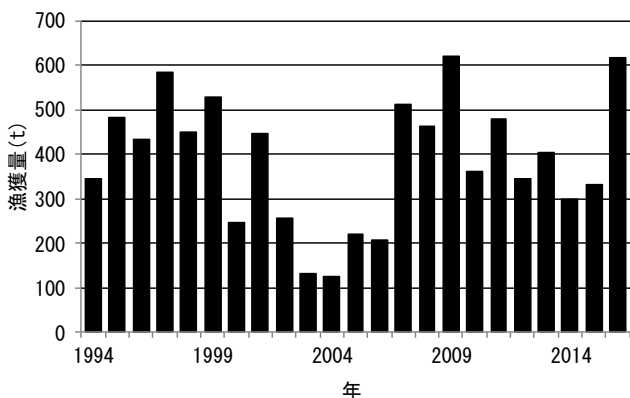


図5. 八戸で漁獲されたサメ類年間漁獲量の推移

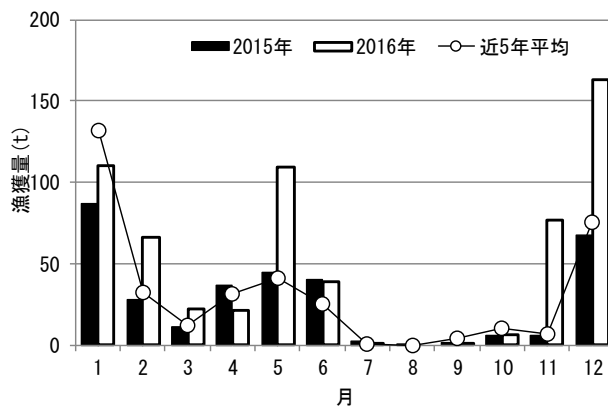


図6. 八戸のサメ類月別漁獲量の推移